

「墨書陶磁器」とその史料化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石黒, ひさ子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21106

《論説》

「墨書陶磁器」とその史料化

石黒 ひさ子

はじめに

日本古代の土器には墨書のあるものがあり、これを「墨書土器」として文字資料の少ない古代史において史料化する試みも行われている。中国においては秦漢時期以前の土器に墨書は見えないのだが、陶磁器に墨書するという行為は三国呉から六朝時期に既に見ることができる。日本における墨書土器と中国の墨書陶磁器の間に直接の相関関係は存在しないが、中国における陶磁器への墨書行為は宋代に入ると広く見られるようになる。個人が所有する陶磁器に記銘をするという習慣は中国では近現代まで継続していたと言う人も少なくない。だが一方でこれらの陶磁器における墨書が歴史を考え得る資料、史料と見なされることはほとんどなかった。

近年、中国において地下鉄建設や都市再開発に伴い、現在の都市における考古学発掘が多くなった。従前より注目されることの多かった唐以前の古代都市に加えて、近年の発掘では宋代以降の遺跡や墓葬が発掘されることも珍しくなくなっている。このような宋代以降の遺跡では当然ながら出土物の分量も極めて多く、特に陶磁器は極めて大量に出土する。更に水中考古学による沈没船調査や陶磁器生産地における窯跡調査も驚異的に発展したことで、考古学的に発見された陶磁器資料量はもはや爆発的といえる勢いで増加している。このような状況の中で、陶磁器に文字のある資料にも注目が集まるようになり、墨書陶磁器に一定の注意を向けた報告書も現れるようになって来ている。だが全体として中国における墨書陶磁器への注目はまだ大きなものではない。

中国産の陶磁器に墨書があり、それを「墨書陶磁器」として特に留意してきたのは、日本博多遺跡群である。博多遺跡群はその調査の嚆矢ともなる1931年の博多湾の護岸埋立工事の浚渫において、この時に出土した陶磁器に墨書のあること、その墨書が「張綱」と読めることがすでに着目されている⁽¹⁾。そして1977年以降、福岡市地下鉄工事に伴って市内の考古学的発掘が開始されると、出土した大量の陶磁器の中に墨書のあるものを「墨書陶磁器」として資料集成も行われた⁽²⁾。

博多遺跡群出土のいわゆる「貿易陶磁」は主に宋代以降の中国で生産されたものであるが、中国における考古学発掘における宋代以降の遺跡の詳細が伝わるのが少なかったこともあり、博多遺跡群発掘初期には、「墨書陶磁器」が中国に存在するかすら不明であった。福建省福州とその周辺に同様の墨書陶磁器が出土することがわかると、これを直接結びつけ、福州の習慣が博多に

もたらされたもの、という考え方も示された⁽³⁾。ところが、近年、都市再開発や地下鉄工事に伴い、中国各地において都市内部での考古学発掘が増加し、それに伴い現代都市地層の下層部分、主に宋代以降の考古学発掘調査も珍しくなくなった。そこではしばしば墨書陶磁器の出土も見られている。少なくとも福州一都市の問題とは言えない状況にある。

本稿ではまず中国を中心とした墨書陶磁器資料の出土状況を概観する。そのうえで資料としての墨書陶磁器の特徴とこれを史料として扱う可能性を検討する。

1. 中国における墨書陶磁器出土の概要

中国国内における墨書陶磁器が出土している地域の範囲は実はかなり広範囲に及ぶ。沿岸部の山東省、上海市、江蘇省、浙江省、福建省、広東省だけではなく、内蒙古自治区、内陸部でも陝西省、河南省、河北省、さらには四川省や寧夏回族自治区にも確認される。沈没船遺跡では南海I号沈没船に墨書陶磁器があることは知られていたが、2018年出版の報告書には墨書陶磁器の専章が設けられている⁽⁴⁾。沈没船とは確認されていないが、台湾澎湖島の海岸近くでも発見されている。韓国で発掘された新安沈没船にも墨書陶磁器がある。日本では博多遺跡群の他にも墨書陶磁器は各地で発見されているが、そのほか中国国外では、韓国やマレーシアでも墨書陶磁器の報告がある。陶磁器をめぐる資料は膨大であり、そこから墨書陶磁器を抽出する作業もまた膨大なものとなる。本稿においては中国本土から出土した墨書陶磁器に主眼をおいて、まずその出土状況を概観していきたい。

中国本土において、墓に埋葬する土器(陶器)に文字が書かれていることは後漢頃に見られる⁽⁵⁾。だが釉薬のかかった陶磁器を生活用具として、そこに何らかの目的を持って墨書したものは、江蘇省南京市内の顔料坊遺跡から出土した三国呉の時代から六朝にかけての陶磁器が現在確認できる最初のものである。ここから出土した墨書陶磁器として報告されているのは92件であり、その出土地点は六朝時期の秦淮河の竹格渡であったと推測される場所である。墨書のある陶磁器は三国呉から南朝時期に及び、即ち陶磁器に墨書をするという習慣はこの時期には存在していたと見ることができる。報告者の王志高氏によると、墨書は姓名、器名、器物の用途、吉祥語、符合、記事の六分類が可能であり、そのうち、姓名が51件を占めることから、墨書の主要な目的は器物の持ち主を標記することであったと考え得る。竹格渡は六朝時期における秦淮河の渡し場の一つであり、墨書陶磁器の出土もまた当時の交易活動と関係があると思われる。六朝建康城に関連する遺跡では更に20件以上の墨書陶磁器が出土し、南京付近の六朝墓からも数件の墨書陶磁器が出土している⁽⁶⁾。

顔料坊遺跡とその周辺の事例を除くと、南北朝時期から隋唐初期の墨書陶磁器は、これまでの

ところほとんどみられない⁽⁷⁾。唐代では、洛陽城皇城東区と西区でそれぞれ2件の墨書陶磁器が報告されている⁽⁸⁾。また西安市の唐長安城東市遺跡からも出土している⁽⁹⁾。江蘇省常州市の正素巷遺跡では、六朝から隋唐時期の文化層から4件の墨書陶磁器が報告されていて、この4件の時期ははっきりしないが、おおよそ唐代と判断することはできる⁽¹⁰⁾。唐代の都市の考古学的調査が進めば、今後資料が増加する可能性はある。

晩唐から五代時期の墨書陶磁器については、張勇氏による近年福建省及び広東省で出土した墨書陶磁器を整理の中に、唐・五代時期の福州市内の事例が2点指摘されている。その一つは福州市北大路漢唐遺跡から出土した唐代墨書陶磁器2件であり、もう一つは福建省二建工地唐五代文化遺跡から出土した墨書陶磁器1件である⁽¹¹⁾。隋唐代に続いて、五代までの墨書陶磁器はこれまで報告された数はこの後の宋代以降の出土数に比べて、極めて少ない。

宋代に入ると墨書陶磁器は非常に多くなる。日本の博多遺跡群で発掘された墨書陶磁器も11世紀から12世紀のものが中心であり、中国南宋時期のものが中心である。上述の張勇氏が整理した福建省と広東省における墨書陶磁器出土地点は10地点におよぶが、これも基本的にはすべて宋代のものである。張勇氏が整理した10地点には西沙華光礁I号と南海I号の二つの沈没船の事例も含まれている。またここには含まれないが、福建省泉州湾宋代海船遺跡からも数件の墨書陶磁器が出土している⁽¹²⁾。

張勇氏によって指摘された沈没船以外の地点は、広東省広州市の大通寺、福建省東山、福建省建陽窯遺跡、福建省南平、福建省福清少林寺遺跡、福建省福州市新店、福州市淮安古窯、福州市内の遺跡があるが、このうち福建省東山、建陽窯遺跡、福州市新店、淮安古窯の遺跡ではいずれも1件の墨書陶磁器が発見されたのみである。南平の呉埭狗母山遺跡は2014年に高速道路の建設に伴って発見されたもので、ここからはかなりの数の墨書陶磁器が出土しているようだが、詳細な報告はない。広州市大通寺遺跡からは数件の北宋時期の墨書陶磁器が出土し、ここに「大通」の墨書があったことは、大通寺の遺跡を確定する一つの根拠となった⁽¹³⁾。福清市少林寺遺跡からも20件ほどの墨書陶磁器が出土していて、そのうち9件には「少林」の文字があることから宋代福建省福清に少林寺のあったことが明示された⁽¹⁴⁾。

福州市内の遺跡からは多くの墨書陶磁器が出土している。北大路遺跡⁽¹⁵⁾は唐代以降も文化層があり、宋代文化層からも墨書陶磁器が出土している。鼓角楼遺跡や湖東路何村遺跡からも数件の墨書陶磁器が出土している。福州市屏山遺跡では1997年に屏山市場工地から100件以上⁽¹⁶⁾、2013年には地下鉄工事に伴う発掘で300件以上の墨書陶磁器が発見されている。この屏山遺跡出土の墨書陶磁器の墨書内容は姓名、単字、身分、地点、時間、花押と記号の6種類に分類が可能である⁽¹⁷⁾。

以上の他にも、宋代には中国各地で墨書陶磁器の発見が報告されている。隋唐洛陽城の発掘で

は同時に同一地点の宋代遺跡も調査されているが、その中で白居易故居遺跡の宋代地層からは十数件の墨書陶磁器が発見された。白居易の居宅は五代後唐時期には普明禪院という寺に改築されているが、この遺跡からは「普明」という墨書が出土している⁽¹⁸⁾。

江蘇省揚州市の宋城西門では1987年の発掘で10件の墨書陶磁器が出土し、その後の宋城発掘でも墨書陶磁器の出土報告がある⁽¹⁹⁾。江蘇省鎮江市の双井路北宋遺跡では9件の墨書陶磁器、南宋時期の灰坑から数件の墨書陶磁器がある⁽²⁰⁾。鎮江京口閘遺跡では唐代から明清時代の墨書陶磁器が出土し、うち宋代のものが5件ある⁽²¹⁾。浙江省杭州南宋恭聖仁烈皇后宅遺跡からも数件の墨書陶磁器の報告がある⁽²²⁾。杭州は南宋の都であり、墨書陶磁器もさらに多く存在していることが予想される。

山東省膠州市板橋鎮遺跡は北宋時期の密州市舶司のあった所である。この遺跡の発掘報告はないが、出土物を掲載した考古文物図集が出版されている。掲載された文物には70件以上の墨書陶磁器があり、宋、金、元代の陶磁器と思われる⁽²³⁾。山東省では黄河がかつて海に入る地点であった墾利県にある海北遺跡出土の陶磁器にも墨書のあるものが報告されている⁽²⁴⁾。山東省青州市の雲門劇院改築時に発見されたという大量の陶磁器の中に墨書陶磁器も含まれている。ここで出土した陶磁器は南北朝時期から近代のものが含まれているというが、公開された資料では金代、元代の陶磁器に墨書がある⁽²⁵⁾。

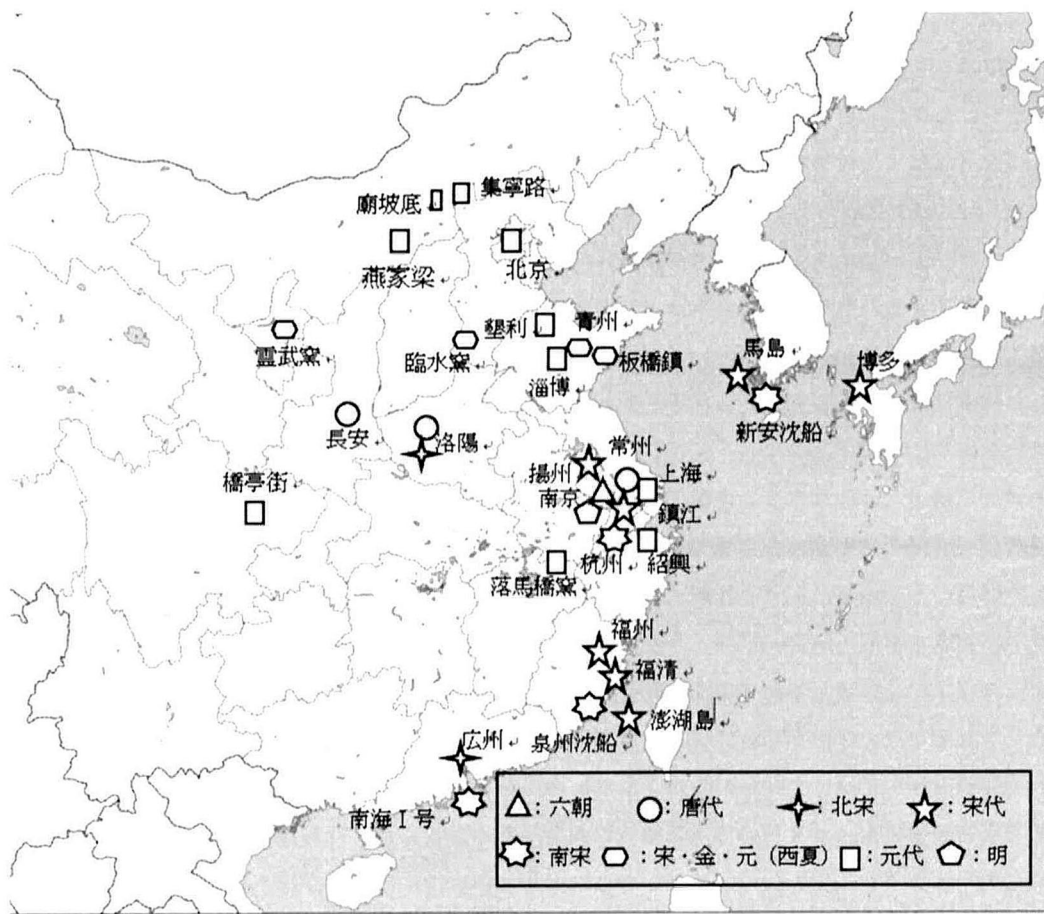
元代の墨書陶磁器は内蒙古に集中して出土している地点がある。内蒙古自治区包頭市の燕家梁遺跡は元代の交通路上の都市遺跡であり、報告書によるこの遺跡からは墨書陶磁器2689件が出土している。その内容は紀年、館肆、店舗、姓氏、花押、パスパ文字、ウイグル式モンゴル文字、数字、寺廟、綽名と蔑称、官職、人名、吉祥語等であり、絵柄模様もある⁽²⁶⁾。同様の交通拠点であるウランサップ市集寧路古城遺跡からも墨書陶磁器が出土している。この遺跡の全体像はまだ報告されていないが、出土した陶磁器の図録に掲載された156件の陶磁器のうち20件に墨書があり、この割合からみてかなりの数の墨書陶磁器が存在すると思われる⁽²⁷⁾。同じウランサップ市にある廟坡底遺跡からは8件の墨書陶磁器の報告がある。この遺跡は高速鉄道建設に伴う緊急発掘で発掘規模も小さいが元代の駅路沿いの遺跡と考えられている⁽²⁸⁾。上海市志丹苑遺跡は元代の水門遺跡だが、ここから出土した宋代陶磁器の中に10件ほど墨書陶磁器が報告されている⁽²⁹⁾。

浙江省紹興の宋六陵遺跡では数件の墨書陶磁器が発見されているが、そのうち一件はパスパ文字が書かれている⁽³⁰⁾。山東省淄博の元代窖藏遺跡で発見された17件の陶磁器のうち7件にはパスパ文字の墨書が報告されている⁽³¹⁾。北京における元大都遺跡の調査でも窖藏遺跡から2件のパスパ文字墨書陶磁器が出土している⁽³²⁾。四川省中江県橋亭街で発見された元代窖藏から出土した37件の陶磁器のうち数件にも墨書がある⁽³³⁾。

陶磁器を生産する窯遺跡の発掘で墨書陶磁器が発見されている事例もある。寧夏回族自治区の

靈武窯は西夏時期の窯であり、ここから文字のある陶磁器の出土が報告されている。その中に墨書陶磁器も含まれ、西夏文字で書かれた墨書もある⁽³⁴⁾。河北省邯鄲市臨水で発見された北朝から元代にかけての窯跡では、金代と元代の層に墨書陶磁器が出土している⁽³⁵⁾。景德鎮落馬橋窯は官窯と民窯が併存する窯跡と考えられている。ここからはパспа文字、漢字表記それぞれの墨書陶磁器が出土している⁽³⁶⁾。

墨書陶磁器出土一覽図



明代の遺跡で墨書陶磁器の報告があるものはこれまでのところほとんど無い。江蘇省南京の宝船廠六作塘遺跡は明代の遺跡であるが、墨書陶磁器が存在し、数件が報告されている⁽³⁷⁾。

水中考古学の成果では、南宋時期の福建省泉州福建省泉州湾宋代海船遺跡は数件の墨書陶磁器の記録がある。同じく南宋時期の広東省南海I号沈没船からも墨書陶磁器の存在が報告されていたが⁽³⁸⁾、2014年から2015年に実施された船体そのものの調査においては墨書陶磁器910件が報告されている⁽³⁹⁾。西沙華光礁I号も南宋時期のもので、数件の墨書陶磁器が発見されている⁽⁴⁰⁾。韓

国で発見された新安沈船からは全体像はよくわからないが墨書陶磁器の出土がある。同じく韓国馬島では沈没船遺跡とは確認できないが、海中の遺跡から155件の陶磁器が発見され、そのうち82件に墨書が見られる⁽⁴¹⁾。台湾澎湖島の海岸で発見された陶磁器にも墨書陶磁器が10件確認できる⁽⁴²⁾。また水中ではないが、マレーシア・サラワク州で発見された138件の陶磁器のうち48件に墨書があるという報告もある⁽⁴³⁾。

ここまで見てきた墨書陶磁器出土地点はいずれも遺跡から出土したものであるが、宋代、金代の墓葬からも墨書陶磁器は出土している⁽⁴⁴⁾。

以上に概観した墨書陶磁器の出土状況は、管見の限りではあるが、墨書陶磁器が存在する範囲は広範に及ぶ。時期の早いものでは六朝時代にも見られるものの、出現する時期の中心は宋代から元代である。地域は博多との関係が指摘されていた福建省が中心というわけではなく、数の点では山東や内蒙古にも集中する遺跡がある。また長安、洛陽、揚州、杭州といった都市遺跡から出土する傾向も指摘できる。都の置かれた長安や杭州のような大都市だけではなく、鎮江や常州といった地方の中規模都市の遺跡でも墨書陶磁器は発見されている。福州市の出土事例は他の都市遺跡に比べて多くなっているが、墨書陶磁器の出現は福州に限られたものとはいえない。また、日本の博多遺跡群もそうであるように、海に面した遺跡や沈没船にも確認できる。ここで挙げた以外にも墨書陶磁器の出土事例は増加しつつあるが、その事例は雑多である。これを史料として利用するには、何らかの目的のある整理が必要である。

2. 墨書の分類

墨書陶磁器には文字が書かれている。中国を中心に出土するものであるから、多くは漢字である。だが花押と考えられる記号的なものや、図案であったり、非漢字である場合もある。時代も地域も様々な墨書陶磁器であるが、その墨書内容には一定の傾向が存在する。

墨書陶磁器が出土した遺跡で墨書の種類が整理されているのは六朝南京顔料坊遺跡(92件)⁽⁴⁵⁾、宋代の福州屏山遺跡(300余件)⁽⁴⁶⁾、元代の包頭燕家梁遺跡(2689件)⁽⁴⁷⁾、南宋沈没船遺跡である南海I号遺跡(910件)⁽⁴⁸⁾、中国宋代時期を中心とする日本の博多遺跡群(2239件)⁽⁴⁹⁾である。これらの遺跡はかなりの数量の墨書陶磁器が報告されているという共通点もあり、以下のその内容を検討してみたい。

顔料坊遺跡出土の墨書は(1)姓名、(2)器名、(3)器物の用途、(4)吉祥語、(5)符号、(6)記事の六分類が可能とある。

屏山遺跡出土の墨書は(1)姓名、(2)単字、(3)身分、(4)地点、(5)時間、(6)花押と記号の6種類に分類が可能とある。

燕家梁遺跡出土の墨書は、(1) 紀年、(2) 館肆、(3) 店舗、(4) 姓氏、(5) 花押、(6) パスパ文字、(7) ウイグル式モンゴル文字、(8) 数字、(9) 寺廟、(10) 綽名と蔑称、(11) 官職、(12) 人名、(13) 吉祥語等、(14) 絵柄模様という。

南海I号 2014年～2015年発掘報告では(1) 姓名類、(2) 「直」字類、(3) 器物用途類、(4) 「網」字系列、(5) 地名、(6) 花押類、(7) 符号類(符号または外国文字に類似するもの)、(8) その他に分類されている。

博多遺跡群出土墨書陶磁器の整理では、(1) 〇〇網、(2) 中国人名、(3) 日本人名、(4) 数字、(5) 人名以外の漢字、(6) 花押、(7) かな文字、(8) 記号の八種類が挙げられている⁽⁵⁰⁾。

これらの記述方式は報告書作成者の表現のままであるため、ここから共通してみられる内容を整理してみると附表のような九分類となる。

附表

遺跡名 地域 時代	① 姓名	② 器名	③ 吉祥	④ 符号 花押	⑤ 記事 紀年	⑥ 身分	⑦ 地名	⑧ 非漢字	⑨ 「網」
建康城遺跡 江蘇省南京 六朝	○	○	○	○	○				
屏山遺跡 福建省福州 主に宋	○		△	○	○	○	○		
燕家梁遺跡 内蒙古包頭 元	○		○	○	○	○	○	○	
南海I号沈船 広東省海域 南宋	○	○		○			○	○	○
博多遺跡群 日本福岡 主に宋	○		△	○				○	○

①姓名(姓名、姓氏、綽名と蔑称、人名、姓名類、日本人名、中国人名等):すべての遺跡に存在する。燕家梁ではモンゴル人名も入るため人名に加えて綽名と蔑称がある。

②器名、器物名、用途:顔料坊遺跡と南海I号遺跡に見える。

③吉祥語、単漢字（吉祥語、単字、人名以外の漢字等）：吉祥語とするのは顔料坊遺跡と燕家梁遺跡だが、用途が他に判断できない漢字があるという点では屏山遺跡、博多遺跡群も含まれる。

④符号、花押（符号、花押と記号、絵柄模様、「直」字類）：個人を著すマークと考えれば、①姓名の別表現とも言える。すべての遺跡に見える。南海I号の「直」字類も花押の一種と見なせる。

⑤記事、時間、紀年、数字：時間や数に関わる何らかの情報を示すものと言える。顔料坊遺跡と屏山遺跡、燕家梁遺跡に見える。

⑥身分（身分、官職）：屏山遺跡と燕家梁遺跡に見える。

⑦地名（地点、館肆、店舗、寺廟、地名）：屏山遺跡、燕家梁遺跡、南海I号遺跡に見える。

⑧非漢字文字（パスパ文字、ウイグル式モンゴル文字、符号（外国文字に類似するもの）、かな文字）：燕家梁遺跡、南海I号遺跡、博多遺跡群に見える。

⑨「綱」字：南海I号遺跡と博多遺跡群に見える。

①姓名と④符号、花押、記号は、陶磁器に関わる個人を表すものといえる。これが時代や性格の異なる遺跡であっても全てに共通して見られることは、墨書行為の目的の一つが陶磁器使用者または所有者である個人を示すことにあることを示すものである。⑥身分も使用者の身分を示すとすれば、広義においては使用者を示すものである。

⑦地名も使用あるいは所有される場を示すものと考えれば、これも使用または所有に関わる。この使用、あるいは所有された場所が特定できるという点は重要である。

②器物の名称は顔料坊遺跡と南海I号遺跡にしか見えない。宋元時代の中国国内、また日本出土とはいえ中国人社会が成立していた博多では器物名を明示する必要がなかったと考えられる。南海I号は南海へ向かう船であり、そこでは器物名の確認が必要であったのかもしれない。

③吉祥語は南海I号の墨書分類にはない。船上では陶磁器は貿易貨として積載されるもので、都市内で使用された可能性のある他の六地点と異なる。その反映とみるのが可能である。

⑤時や数にかかわる情報は南海I号遺跡と博多遺跡群では特記されていない。しかし記号、符号、その他といった部分に数字のある可能性もある。年代が示されるものは遺跡や陶磁器の編年作業にも重要な役割を果たす。

⑧非漢字文字が存在する燕家梁遺跡、南海I号遺跡、博多遺跡群はいずれも非漢族との接触がある遺跡である。パスパ文字墨書は上記の遺跡以外にも元代の遺跡に確認ができる。パスパ文字の出土地点は非漢族との接触が存在したのか確認できない地域もあり、これらはパスパ文字の使用の広がりを考える上で重要な史料にもなり得る。

⑨「綱」字墨書は博多遺跡群に多くみられるが、中国大陸内の遺跡にはこれまでのところ確認されていないという特徴を持つ。日本国内では博多以外の地域にも「綱」字墨書が出土している場所がある。南海I号遺跡の他、泉州宋代海船遺跡にも「綱」字墨書の報告がある。「綱」字墨書

陶磁器は台湾澎湖島海岸からも三件出土している。韓国馬島海中遺跡では出土陶磁器 155 件のうち墨書があるものが 82 件という墨書の多い遺跡だが、墨書のうち 30 件余は「綱」字に関わる記載がある。南海I号遺跡も含めて、「綱」字は沈没船と中国大陸外にのみ出土することから、「綱首」に代表される貿易集団「綱」を示すと考えられる。

墨書内容が整理されている遺跡は六朝時期から元まで、地域もモンゴルから南海にまで及ぶが、墨書によって陶磁器が所属する個人等を示す、という点は時代、地域に関わらず存在する。ここから墨書する第一の目的は陶磁器の所有を示すことにあるといえる。しかし、これがいつ、どこで書かれたものなのかを判断することは難しい。出土地と一致する地名が書かれている場合には、その出土地で墨書されたことがわかる。

また時期の早い顔料坊遺跡や海外に向かう南海I号には器名がある。これは生産地から消費地までの流通の過程で器の名称が混乱しないためと考えられ、流通の過程が書かれた可能性を指摘できる。また中国大陸内の都市遺跡には「綱」字の墨書が無いことから「綱」字も流通の過程において書かれるものであったことを示す。一方で、南海I号には吉祥語が無いことから、吉祥語は消費地である都市部で書かれたといえる。

墨書される多くの内容は個人の姓名や符号である。これらの墨書については、これがどこで書かれたものか、はわかりにくい。だが、年代が記される等時間にかかわる墨書はそのまま史料として活用することが可能である。「綱」字のように特徴的な出土傾向があれば、書写された場を推定することもできる。そこで、次に墨書がいつ、どこで書かれたのか、について考える方法を探ってみたい。

3. 墨書はいつ書かれたのか

姓名や花押のような符号、身分や地名などは、一般的には陶磁器の所有者または使用者を示すものであり、陶磁器が商品として購入された後に記入されたと考え得る。だが「綱」字墨書のように貿易貨として積載される時に書かれた墨書も存在する。南海I号、泉州宋代海船、新安沈船という沈没船遺跡からは荷札として用いられたと考えられる木牘も出土している。貿易船に貨物を積載するときには木牘を使用するだけでなく、陶磁器に直接文字を書き込む行為も存在したのである。墨書陶磁器への墨書行為は、消費地においてだけではないことを注意しておく必要がある。

陶磁器は生産地から中継地を経て消費地に向かう。墨書陶磁器が発見されるのは主に消費地である都市遺跡と、貿易中継地である港湾都市や沈没船である。しかし、生産地である窯遺跡で発見されたという報告もある。河北省邯鄲の臨水窯遺跡では金代時期と元代時期にそれぞれ墨書陶

磁器の出土があり、特に金代時期の器物にはよく墨書が見られるという。その全体像は不明だが、報告にある墨書は花押状の符号である⁽⁵¹⁾。景德鎮落馬橋窯遺跡はパスパ文字墨書陶磁器と、「汪宅」墨書陶磁器が報告されている。報告ではパスパ文字はモンゴル人または外来の工匠が使用したもの、「汪宅」は漢人が使用したもの、として、この窯が単なる民窯ではなく、官窯と民窯が併存する窯であることの傍証ともなる、という⁽⁵²⁾。

また寧夏回族自治区にある靈武窯からは西夏文字・漢字の墨書陶磁器が出土している。この窯跡では西夏中期の層、西夏晩期の層、元代の層からそれぞれ文字資料の出土が報告されている。このうち墨書があるのは11世紀末から12世紀にかけての西夏中期の層であり、文字資料13件に西夏文字墨書陶磁器2件、漢字墨書陶磁器2件が含まれる。これ以外の文字は梵字、漢字が刻書されたものである。西夏晩期の層からは刻書が1件、元代の層からは57件の文字資料が出土しているが、西夏文字、梵字、漢字のいずれも刻書されたものである。西夏中期の墨書内容は、西夏文字は文章状のものである。漢字は西夏仁宗期の年号「乾祐」（1170年～1193年）を含む紀年的なもの、銭を数える「吊」と数字が組み合わされた価格表示的なものであり、どちらも複数の文字が確認できる⁽⁵³⁾。

現在報告のある窯跡から出土した墨書陶磁器は、以上の西夏の窯と金代、元代の臨水窯、景德鎮窯のみである。越窯、龍泉窯など南方の窯から墨書陶磁器が出土したという報告はこれまでにない。窯跡で発見される文字は、陶磁器製品や窯用具に刻書されたものが多い。西夏の靈武窯でも元代の層からは刻書しか出土していない。また靈武窯の墨書は漢字による紀年等、個人を特定するものではなく記事的な内容である。落馬橋窯の墨書は生産者が当地の生活において使用したものと理解されている。窯跡における墨書陶磁器は、現在のところ限られた窯でしか確認できないことから、生産地において墨書が記入された製品が流通したかどうかは不明である。

注意が必要なのは臨水窯の花押状の符号である。墨書陶磁器には個人を識別する姓名や花押が多くみられる。都市遺跡で出土する墨書は都市における消費者が記入したと考えるのが普通だが、これが生産時に記入されたものが流通したという理解も可能となるからである。現状では他の窯跡の事例がなく、可能性を指摘することしかできない。

花押のように個人を識別する記載は、生産、流通、消費という様々な場面で関わった個人の標識という可能性がある。墨書がいつ、どこで書かれたのか、について注目すべきなのは地名、特に寺に関わる記載である。墨書陶磁器の出土地には寺の遺跡が比較的多くみられる。概観した中では、隋唐洛陽城内の白居易故居の宋代地層にある普明禪院⁽⁵⁴⁾、広東省広州市の大通寺⁽⁵⁵⁾、福建省福清の少林寺遺跡⁽⁵⁶⁾がある。また1件のみの出土であるため概観には含めていないが、西安市青龍寺の唐代古井からも1件の墨書陶磁器が出土している⁽⁵⁷⁾。墨書されたのは中唐時期の鞏義窯のもので、墨書陶磁器の数が比較的少ない晩唐以前のものである。

杭州南宋官窯博物館で2016年に実施された「臨安人的一天—杭州民間収蔵の南宋器物」の展覧会図録には10件余の墨書陶磁器が掲載されている。そこには「浄慈」が7件あるほか、「伝法寺」、「靈芝」という杭州に現在まで存在している寺の名前が存在している⁽⁵⁸⁾。民間収蔵品であるため、具体的な出土地等は不明であるが、これらの寺は杭州市内に歴史的に存在してきた寺である。寺に発掘調査が入ることは多くはないが、寺内部で土木作業が行われていることは多々目にすることであり、その中で出現、収集された可能性もある。

江蘇省南通市如東県は、現在も海に面した県であるが、唐代の海岸線は更に内陸に入り、現在の県城に近かった。この県城内で発見された遺跡が如東国清寺遺跡である。この寺は唐代にも同位置に存在し、円仁が『入唐求法巡礼行記』で中国での上陸後直後に滞在した寺として記録する寺である。発掘報告はまだ刊行されていないが、新聞報道等で概要が公開された⁽⁵⁹⁾。この遺跡から出土した宋代の陶磁器には「国清」の墨書陶磁器が出現し、歴史地理的実証に加えてこの遺跡を国清寺遺跡と判断する一助を担っている。

宋代の寺院は、杭州市内の寺のように宋代以来現在まで同一地に存在することがむしろ普通であり、遺跡として考古学的に発掘調査されることは多くはない。その中で比較的大規模な発掘が行われた事例である福清少林寺や洛陽城白居易故居の普明禪院ではいずれも寺名を示す墨書が出現している。また住職を示す「当住」の墨書も同時に出現することが多い。寺から出土する墨書に寺の名前が書かれていることは、墨書する目的がその器の所属を示すことであったことを明確に示す。墨書されたもので多く見られるものは姓を示す漢字である。この墨書によって器が個人に帰属することはわかるが、それが生産から消費のどの時点で関わった人物なのか、を決定するのは難しい。墓から出土した墨書であっても、墓碑上から判断される墓主の姓とは異なる姓のものが出土することもある⁽⁶⁰⁾。

また「当住」のように寺内での役割を示す墨書からも、墨書はその使用者、使用場所を確認するために書かれたことがわかる。これが墨書陶磁器を史料として扱う上でも重要であることはいうまでもない。このような性質は地名にかかわる墨書全てに共通するが、特に寺名の場合には歴史地理的な文献史料との照合も行いやすい。墨書陶磁器が多くみられる宋代から元代の寺跡に詳細な考古学的調査が行われることは多くはないが、今後情報が明らかになる如東国清寺遺跡を含めて、寺遺跡から出土する墨書陶磁器は、墨書内容を史料化するための基準となるものである。寺院遺跡における墨書陶磁器の傾向を明らかにすることは墨書がいつ、どこで書かれたのか、を考え、墨書内容を史料化する上でも非常に重要となる。

墨書がどのような条件で書かれたのか、考えるもう一つの手がかりに、墨書陶磁器が非常に少ない地域の存在がある。本稿では最後にこの問題についても考えてみたい。

4. 墨書を行わない地への視座

墨書陶磁器は大量に陶磁器が出土する遺跡において、そのごく一部分にしかみられないのが通常である。また陶磁器は破片となっても消滅はしない遺物であるから、遺跡ごとの出土量は膨大であり、その全てに詳細な調査が行われることもあまりない。その中で墨書のある陶磁器というのは比較的目立つものなので、気付かれやすいという特典はある。

これまでの墨書陶磁器の出土地点を見ると、都市遺跡であること、貿易や交易に関わる地域であることが比較的共通して見られる。この二つの条件を持つ日本の博多遺跡群にも大量の墨書陶磁器が存在している。博多と繋がる中国の港は明州、すなわち寧波である。寧波もまた都市としての歴史が長く、市舶司の置かれた貿易の中心都市の一つである。そして寧波でも都市再開発、地下鉄建設が行われ、都市内部の考古学調査は進み、大量の陶磁器資料が発見されている。だが、墨書のあるものは極端に少ない。寧波で確認できる墨書陶磁器資料は民間人の収集品の中に1点と⁽⁶¹⁾、報告書はないが寧波博物館の特別展に展示されていた南宋時期の崇教寺遺跡出土の1件、近代の天寧寺遺跡から出土した1件のみである⁽⁶²⁾。

近年発掘された江蘇省太倉樊村涇遺跡は、元代の龍泉窯を中心にした倉庫貯蓄物流拠点ではないかと考えられ、数万点という信じられないほどの龍泉窯製品を中心とした陶磁器が出土している。またここは元の慶元市舶の分司があったのではないかとみられ、韓国で発見された新安沈船積載の龍泉窯産陶磁器と器形や紋様が一致することも指摘されている。この遺跡の報告書はまだ刊行されていないが、陶磁器の図録が先行して公刊された⁽⁶³⁾。ここで報告された墨書のあるものは碗の内部に墨書のある陶磁器片が1件のみである。

大都とカラコルムを繋ぐ経路上にあり、草原のシルクロードにも繋がる交易路沿いにある集寧路古城遺跡も、同じように元代の大規模な遺跡でありながらまだ遺跡出土遺物の全体像は不明であり、同じく陶磁器の図録のみが先行して公刊されている。この図録には20件の墨書陶磁器が見られる⁽⁶⁴⁾。太倉樊村涇遺跡は出土陶磁器量に対して、明らかに墨書陶磁器が極めて少ない遺跡と言える。

宋、金、元にかけての遺跡であること以外、遺跡の概要もはっきりしていないが、北宋密州市舶司と同位置にある山東省膠州市板橋鎮遺跡も遺跡全体の報告書は未刊ながら、出土物を掲載した考古文物図集が出版されている。ここに掲載された文物には70件以上の墨書陶磁器がある⁽⁶⁵⁾。

寧波・太倉樊村涇の状況と集寧路古城遺跡・板橋鎮遺跡の状況は対照的である。無論、報告書刊行時には資料の整理が進んで実態が異なっていることが判明し、考古学調査の進展によって新資料が出現するという可能性は否定できない。だが現状での墨書陶磁器出土状況を見る限り、いずれも宋代から元代の交通要衝にあり、一定規模以上の都市遺跡であるという共通項を持ちなが

ら、墨書陶磁器の出土状況には大きな違いが存在する。

宋代に市舶司が常設されていたのは広州、杭州、明州であり、開始時期がやや遅れるものに泉州がある。板橋鎮遺跡が相当すると考えられる密州市舶司は元祐三（1088）年に市舶司が設置されているが、市舶司としての活動時期は長くはなく、1127年には北宋政権が崩壊して南遷し、南宋時期に入ると、密州は金朝、後に元朝に管理される地域となる。板橋鎮遺跡から出土した遺物の全容は不明だが、公刊された図録には金代、元代のものが多く見られる。墨書陶磁器も同様であり、これ国家の管理をうける市舶司としてではなく、南宋領域外の民間貿易の拠点としての密州時期のものであることを明確に示している。

明州、すなわち今日の寧波は東アジア地域へ開かれた海港として中国と日本、また中国と朝鮮半島の交流の一大拠点であったことは否定しようのない事実である。だが、明州が北宋時期、南宋時期を通じた市舶司であり、国家の貿易管理を受ける地域であったことと寧波出土の墨書陶磁器が極端に少ないことには何からの関係性を見いだすことが可能ではないだろうか。南宋時期には民間貿易拠点であったことが予想される板橋鎮遺跡から多くの墨書陶磁器が出土していることは、「官」によって貿易が管理される地域とそうでない地域の違いを暗示するものと言えるだろう。

同じく墨書陶磁器が多く出土していることが予想される集寧路古城もまた元都大都とカラコルムと結ぶ路線にある都市ではあるが、官による管理については不明である。一方で陶磁器片数万に上るといふ大量の陶磁器を出土し、新安沈船との関連から東アジア海上貿易との関わり指摘される太倉樊村涇遺跡では墨書陶磁器はほとんど報告されていない。南宋時期、明州府は慶元府と改名し、これが元代には慶元路となる。ここには宋代の市舶司制度を引き継ぐ慶元市舶提挙司が置かれていた。太倉樊村涇遺跡は発掘直後からこの市舶提挙司の分司が置かれていたのではないかとも言われている。これもまだ実証されたものではないが、墨書陶磁器の出土状況を見る限り、太倉樊村涇遺跡は寧波の状況に類似している。墨書陶磁器の存在は、貿易行為において「官」と「民」がどのような関係にあったのかを示す一つの史料となる可能性を秘めているといえるだろう。

おわりに

「墨書陶磁器」という資料は、博多遺跡群でこそ注目されてきたものの、中国考古学や墨書陶磁器が多く存在する中国宋代、元代の歴史学においては大きく取り上げられることはなかった。しかし、本稿で概観したように、近年では中国国内でも存在が確認できるようになり、出土地域や出土量も増加している。

宋代、元代の陶磁器は特別な器ではなく、生活に用いられる器である。墨書が残された器は大

量生産された廉価な器であることが多い。このような器に書かれた文字は当時の生活に密着した文字である。墨書陶磁器を調査していると、特に大都市遺跡では陶磁器への標識的な文字とはいえ美しく整った文字に出会うことも多い。これは庶民レベルでも整った文字を書くことが当然であった高水準な都市生活を示すものといえる。

また非漢字が書かれたもの、特に元代にはパスパ文字が書かれることも多い。パスパ文字は元朝が制定したものであるが、一般への浸透については不明である。だが墨書陶磁器という消費の末端でもパスパ文字は利用されている。このパスパ文字墨書は文字受容の歴史を理解する史料としての可能性が存在している。

非漢字では博多遺跡群にはかな文字墨書が存在し、南海I号の報告からはアラビア文字と思われる文字が出現している。内蒙古燕家梁遺跡にはパスパ文字の他、ウイグル式モンゴル文字も存在する。西夏の靈武窯では西夏文字で墨書されたものもある。契丹文字はこれまでに報告されたものはないが、今後出現する可能性は多いにあるといえるだろう。墨書陶磁器に書かれる文字は漢字のみではなかったことは確実である。その地域の言語、貿易に関わる人々が用いる言語がそのまま陶磁器に墨書された。これらの非漢字墨書には、中国文化圏と非漢民族、民族文字の使用という点からの史料化に着目していきたいと考えている。

陶磁器上のごく僅かなスペースに墨書される内容は、もとより数文字の情報しかない。しかしそれを集成することによって、同時に生活に即した史料をとしてマイクロにもマクロにも利用することが可能となる。本稿で示した方向性に基づき、今後より具体的事例を示すことを目標とした。

墨書陶磁器にはベトナム、東南アジアにも事例が存在するという。貿易中に記載されたものや、現地に形成された中国人居住地で記入されたものであろう。朝鮮半島に関わる事例は、本稿では新安沈船、馬島海中遺跡に触れたが、半島内、特に港湾部等にも存在している可能性がある。博多遺跡群のような集中した出土ではないが、日本においても多くの出土事例がある。このようにより広域における墨書陶磁器の事例についても爾後の課題としたい。

註

- (1) 山本博「元寇役と博多湾出土遺物」(上・下)『歴史と地理』30-3・4、1932年。
- (2) 博多研究会『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会、1996年、大庭康時「博多遺跡群墨書資料集成2」、『博多研究会誌』第11号、2003年。
- (3) 黄建秋「福岡市博多遺址群出土宋代陶瓷墨書研究」、『学海』2007年第4期、張勇「福州地区発見的宋元墨書」『福建文物』1998年第一期。
- (4) 国家文物局水下文化遺産保護中心・広東省文物考古研究所・中国文化遺産研究院・広東省博

- 物館・広東海上絲綢之路博物館編著『南海I号沈船考古報告之二—2014～2015年発掘』文物出版社、2018年。
- (5) 中国における「筆で文字が書かれている土器」には、前漢中期から新時期（前1～1世紀頃）、死者のために埋葬する穀物名等の数文字を記した「陶倉」や「陶壺」、後漢時期（2世紀頃）死者の鎮魂のため長文の銘文が書かれた後漢型鎮墓瓶、魏晉南北朝時代（3～5世紀）、敦煌地域に特徴的に出土する「陶罐」や「陶鉢」の形をとる敦煌型鎮墓瓶がある。鈴木雅隆「後漢鎮墓瓶集成」、『長江流域文化研究所年報』第5号、2007年、關尾史郎編『中国西北地域出土鎮墓文集成（稿）』新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊VII、新潟大学「大域的文化システムの再構築に関する資料的研究」プロジェクト、2005年、關尾史郎「画像磚の出土墓をめぐって—敦煌新出土鎮墓瓶初探—中国西北地域出土鎮墓瓶集成（稿）」補遺（続）一、『西北出土文献研究』第9号、2011年、同「敦煌の古墓群と出土鎮墓文」（上）/（下）、『資料学研究』第4号/第5号、2007年/2008年、同「随葬衣物疏と鎮墓文—新たな敦煌トルファン学のために—」、『西北出土文献研究』第6号、2008年、同『もうひとつの敦煌—鎮墓瓶と画像磚の世界—』新大人文叢書7、高志書院、2011年。
- (6) 王志高「南京顔料坊出土六朝墨書瓷器分析」、『中国国家博物館館刊』2014年第1期（総第126期）、王志高「六朝建康城遺跡出土の墨書磁器の整理と分析—南京市顔料坊出土品を例として—」明治大学古代学研究所『古代学研究所紀要』第18号、2012年。
- (7) 報告はほとんどないが、湖南省郴州蘇仙橋遺址の古井戸J10から「清」字が外底部に墨書された陶磁器1件が出土した事例もあり、今後事例が増加する可能性はある。（湖南省文物考古研究所、郴州市文物処「湖南省郴州蘇仙橋遺址発掘簡報」、『湖南考古輯刊』第8集、2009年）。
- (8) 中国社会科学院考古研究所編『隋唐洛陽城1959年—2001年考古発掘報告』文物出版社、2014年。
- (9) 龔国强、李春林「陝西西安唐長安城遺址の発掘—2015年社科院考古所田野考古成果（十八）」、2016年1月25日『中国考古網』掲載、中国社会科学院考古学研究所HP
<http://www.kaogu.cn/zixun/2015nianzhongguoshehuixueyuankaoguyanjiusuoitianyekaoquchengguoxiliebaodao/2016/0125/52912.html>。
- (10) 常州市考古研究所「常州市区正素巷遺址考古調査与報告」、『常州文博』2015年第1期（総54期）。唐代の墨書陶磁器は江蘇省鎮江でも1件確認できる。鎮江博物館『鎮江京口閘遺址』江蘇大学出版社、2015年。
- (11) 張勇「淺談近年出土、出水的唐宋時期墨書瓷器」、『南方文物』2016年第1期。
- (12) 福建省泉州海外交通史博物館編『泉州湾宋代海船発掘与研究』海洋出版社、1987年。
- (13) 広州市文物考古研究所「広州大通寺遺址発掘簡報」、広州考古研究所『羊城考古發現与研究（一）』

文物出版社、2005年。

- (14) 福建博物院考古研究所、福州市文物考古工作队、福清市文化局編『福清少林寺』海潮攝影芸術出版社、2005年。
- (15) 福州市文物工作队「福州北大路漢唐遺址發掘報告」、『福建文博』2003年第3期。
- (16) 張勇「福州地区発現的宋元墨書」、『福建文博』1998年第1期。
- (17) 梁如龍「福州市地铁屏山遺址河溝出土瓷器墨書分析」、『福建文博』2016年第4期。
- (18) 中国社会科学院考古研究所編『隋唐洛陽城 1959年—2001年考古發掘報告』(前出)。
- (19) 中国社会科学院考古研究所、南京博物院揚州考古隊、揚州市文化局「揚州宋城西門發掘報告」、『考古学报』1999年第1期、中国社会科学院考古研究所、南京博物院、揚州市文物考古研究所編『揚州城遺址考古發掘報告 1999-2013年』科学出版社、2015年、王小迎、王睿「江蘇揚州南宋宝祐城西城門外出土陶瓷器」、『中国国家博物館館刊』2015年第9期。
- (20) 劉建国主編『名城地下的名城—鎮江城市考古紀実』江蘇人民出版社、2006年。
- (21) 鎮江博物館『鎮江京口關遺址』(前出)。
- (22) 杭州市文物考古研究所編『南宋恭聖仁列皇后宅遺址』文物出版社、2008年。
- (23) 青島市文物保護考古研究所編『胶州板橋鎮遺址考古文物図集』科学出版社、2014年。
- (24) 徐波、柴麗平「山東墾利県海北遺址新発現」、『華夏考古』2016年第1期。また海北遺跡の西北140km程のところにある河北省黄驛市海豊鎮遺跡からは金代墨書陶磁器が1件報告されている。海豊鎮は金代に塩使司が置かれた地であり、この遺跡から大量の陶磁器が出土したことから、報告書ではこの遺跡を金元時期の貿易港遺跡と推測している。
- (25) 李亮亮、劉威「山東青州雲門劇院出土瓷器鑑賞」、『東方収蔵』2017年第6期。
- (26) 内蒙古自治区文物考古研究所、包頭市文物管理处編、塔拉、張海斌、張紅星主編『包頭燕家梁遺址發掘報告』科学出版社、2010年。
- (27) 陳永志主編『內蒙古集寧路古城遺址出土瓷器』文物出版社、2004年。
- (28) 内蒙古自治区文物考古研究所、卓資県文物管理所「烏蘭察布市卓察県廟坡底遺址發掘簡報」、『草原文物』2016年第2期。
- (29) 上海博物館編、宋建主編『志丹苑：上海元代水閘遺址考古報告』科学出版社、2018年。
- (30) 紹興県文化発展中心、越国文化博物館編『宋六陵遺物萃編』西泠印社、2011年。
- (31) 張光明、畢思梁「山東淄博出土元代窖藏瓷器」、『文物』1986年第12期。
- (32) 中国科学院考古研究所北京市文物管理处元大都考古隊「記元大都発現的八思巴字文物」、『考古』1972年第4期。
- (33) 中江県文物保護管理所「四川中江県橋亭街元代瓷器窖藏」、『四川文物』2014年第5期。
- (34) 中国社会科学院考古研究所編『寧夏靈武窯發掘報告』中国大百科全書出版社、1995年。

- (35) 邯鄲市文物保護研究所、峰峰礦区文物保管所「河北邯鄲臨水北朝至元代瓷窯遺址發掘簡報」、『文物』2015年第8期。
- (36) 江建新「論落馬橋窯址出土的元青花瓷器—兼論元代窯業的若干問題」、『文物』2017年第5期。
- (37) 南京市博物館『宝船廠遺址—南京明宝船廠六作塘考古報告』文物出版社、2006年。
- (38) 広東省文物考古研究所編『「南海I号」的考古試掘』科学出版社2011年、国家文物局水下文化遺產保護中心、中国国家博物館、広東省文物考古研究所、陽江市博物館編『南海1号沈船考古報告之一—1989-2004年調査』、文物出版社、2017年、陳波「南海I号墨書問題研究」、『東南文化』2013年第3期。
- (39) 国家文物局水下文化遺產保護中心、広東省文物考古研究所、中国文化遺產研究院、広東省博物館、広東海上絲綢之路博物館編『南海I号沈船考古報告之二—2014~2015年發掘』文物出版社、2018年。
- (40) 張勇「淺談近年出土、出水的唐宋時期墨書瓷器」(前出)、このほか、漳州海域の沈没船に墨書陶磁器1件(福建省博物院、漳浦県博物館「漳浦県菜嶼列島沈船遺址出水文物整理簡報」、『福建文博』2013年第3期)、龍海半洋礁一号沈船に墨書陶磁器1件(国家文物局水下文化遺產保護中心、中国国家博物館、福建博物院、福州市文物考古工作隊『福建沿海水下考古調査報告(1989~2010)』文物出版社、2017年、386頁)が確認でき、沈没船からの墨書陶磁器は更に多くの事例があると思われる。
- (41) 国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』国立海洋文化財研究所(韓国)、2013年。同書掲載임경희(RimGyeongHee)「마도해역발굴물서명도자기의역사적성격(馬島海域發掘墨書陶磁器の歴史的 성격)」に新安沈船出土墨書陶磁器についての言及がある。
- (42) 陳信雄『澎湖宋元陶磁』澎湖県立文化中心、1986年、同「澎湖馬公水下古与馬公港歴史探索」、中国国家博物館水下考古研究中心編『水下考古学研究』第1巻、2012年。
- (43) 柯佳育「馬來西亞砂朥越州沙隆河出土的宋元華南瓷器初探」、『海洋遺產和考古』第2輯、科学出版社、2015年。
- (44) 江西省博物館編『江西宋代紀年墓与紀年青白瓷』(文物出版社、2016年)掲載の瑞昌市北宋宣和六年墓から墨書陶磁器2件、樟樹市南宋景定元年墓から墨書陶磁器1件、趙光林、張寧「金代瓷器初步探索」(『考古』1979年第5期)掲載の山西侯馬金墓に墨書陶磁器1件が確認できる。
- (45) 王志高「南京顔料坊出土六朝墨書瓷器分析」(前出)。
- (46) 梁如龍「福州市地铁屏山遺址河溝出土瓷器墨書分析」(前出)。
- (47) 内蒙古自治区文物考古研究所等主編『包頭燕家梁遺址發掘報告』(前出)。
- (48) 国家文物局水下文化遺產保護中心等編『南海I号沈船考古報告之二—2014~2015年發掘』(前

出)。

- (49) 博多研究会『博多遺跡群出土墨書資料集成』(前出)にある1274件と大庭康時「博多遺跡群墨書資料集成2」(前出)の865件の合計である。
- (50) 佐伯弘次「博多墨書陶磁器をめぐる諸問題」、『博多遺跡群墨書資料集成』(前出)。
- (51) 邯鄲市文物保護研究所、峰峰礦区文物保管所「河北邯鄲臨水北朝至元代瓷窯遺址発掘簡報」(前出)。
- (52) 江建新「論落馬橋窯址出土の元青花瓷器—兼論元代窯業の若干問題」(前出)。
- (53) 中国社会科学院考古研究所編『寧夏靈武窯発掘報告』(前出)。
- (54) 中国社会科学院考古研究所編『隋唐洛陽城 1959年—2001年考古発掘報告』(前出)。
- (55) 広州市文物考古研究所「広州大通寺遺址発掘簡報」(前出)。
- (56) 福建博物院考古研究所等編『福清少林寺』(前出)。
- (57) 西安市文物保護考古研究院「西安青龍寺唐代古井発掘簡報」『文物』2017年第2期。
- (58) 金霄航、鄧禾穎編『臨安人的一天—杭州民間收藏の南宋器物』中国文化芸術出版社、2016年。
- (59) 2018年7月30日朝日新聞夕刊(社会欄)、2018年8月20日毎日新聞夕刊(文化欄)に中国江蘇省出土唐代国清寺遺跡について報道されている。
- (60) 瑞昌市北宋宣和六年墓は出土した地券から墓主は「何毅」と判明するが、出土した墨書陶磁器は「載」と「正臣」であり、墓主の姓名と直接関わる文字ではない。なお「正臣」と報告書は积字するが、「臣」とされる文字は花押の可能性がある。江西省博物館編『江西宋代紀年墓与紀年青白瓷』(前出)。
- (61) 朱勇偉、陳鋼『寧波古陶瓷拾遺』寧波出版社、2007年。
- (62) 「新世紀寧波考古成果展」、『寧博之窗』2017年第1期(総29期)。この展覧会で展示されていた崇教寺遺跡出土の「官」字墨書陶磁器(南宋時期)は上記文章中には紹介されていない。
- (63) 蘇州考古研究所、太倉博物館編『大元・倉:太倉樊村涇遺址出土瓷器精粹』上海古籍出版社、2018年。
- (64) 陳永志主編『內蒙古集寧路古城遺址出土瓷器』(前出)。
- (65) 青島市文物保護考古研究所編『膠州板橋鎮遺址考古文物図集』(前出)。

附記: 本稿はJSPS科研費JP26370833、17K03146による成果の一部である。

(明治大学政治経済学部非常勤講師)